

地域日本語教室における 学習者のニーズに基づいた授業実践

石川 紗莉・宇都宮絵里・児島 由佳
西條 結人・曹 芳・田中 大輝

地域日本語教室における 学習者のニーズに基づいた授業実践

石川 紗莉・宇都宮絵里・児島 由佳
西條 結人・曹 芳・田中 大輝

1. はじめに (注1)

近年の日本社会においては、在留外国人の増加・定住化に伴い、地域社会での多文化化が進行し、様々な人々が居住する多文化共生社会になりつつある。そのような地域の多文化化において重要な役割を担っているのが地域日本語教室である。地域日本語教室は、その地域に在住する「生活者としての外国人」が日本語を学習する場所としてだけでなく、地域の人々が交流するための場としても重要である。しかし、米勢(2006)、池上(2007)、野山(2013)などによると、日本全国の地域日本語教室には(1)のような問題点や課題があるという。

(1) 日本全国の地域日本語教室の問題点・課題

- a. 教室の開催時間や開催場所が限られている。
- b. 学習者が多様で学習者のニーズと授業内容が合っていないことがある。
- c. 教室の運営を支えていく仕組みづくりが必要である。
- d. 地域での支援ボランティアの育成が急務である。
- e. 活動を支える人材・情報等の資源を一定の場所に集めて分類・流通させるためのセンターの設置およびその充実化が必要である。

このような問題点や課題は、筆者らが支援者として参加している鳴門日本語教室でも共通に見られる点が多い。そこで、本研究では、鳴門日本語教室における問題点を改めて抽出し、それを改善するための授業実践を行った。そこで明らかになった点を、今後、地域の日本語教室が目指すべき点として提言したい (注2)。

今回、授業実践を行った鳴門日本語教室は、2007年9月に鳴門市国際交流協会(現：鳴門ダイバーシティクラブ)と鳴門教育大学大学院日本語教育分野が協働で立ち上げた、鳴門市在住の外国人のための地域日本語教室である。鳴門市共済会館会議室にて毎週水曜日19:00から20:30まで、鳴門教育大学の学生、日本語専攻の留学生、鳴門市在住の市民ボランティアが中心となって支援活動を行っている。クラスは、学習者の習熟度に合わせて、入門、初級、中級、上級の4つが開設されており、学習者の日本語能力に合わせた学習が可能と

なっている^(注3)。学習者は中国語を母語とする者が主であるが、スペイン語や英語を母語とする者もあり、職業等も多様である。今回の授業実践の対象となった学習者の詳細は(2)の通りである。

(2) 授業実践の対象となった学習者の詳細^(注4)

学習者	性別	職業	出身国	日本在住歴	日本語学習歴	学習形態	在籍クラス
A	女	主婦	フィリピン	2年	1年	日本：鳴門日本語教室	入門
B	女	主婦	中国	2年1か月	2年1か月	日本：鳴門日本語教室・テレビで学習	初級
C	女	ALT	アメリカ	1年	1年	日本：鳴門日本語教室・独学	初級
D	女	ALT	カナダ	5年8か月	2年7か月 (母国1年、 日本1年7 か月)	母国：大学 日本：インターナショナルスクール・短期留学・鳴門日本語教室	中級
E	女	主婦	中国	2年4か月	1年11か月	日本：鳴門日本語教室	中級
F	女	パート	中国	3年	2年	日本：鳴門日本語教室	中級
G	女	ホテル従業員	中国	10年	1年	日本：鳴門日本語教室	中級
H	女	事務職	中国	10年	10年6か月 (母国6か月、 日本10年)	母国：独学 日本：鳴門日本語教室・独学	上級
I	女	レストラン勤務	ペルー	13年	13年6か月 (ほぼすべて日本)	母国：日秘文化会館 ^(注5) 日本：鳴門日本語教室・独学	上級

9名の学習者の日本在住歴は1年から13年と幅広い。日本語学習歴に関しては、鳴門日本語教室や独学で長期に渡って学んでいるという学習者がほとんどであるが、学習者D、H、Iのように来日前から自国で学習経験があるという学習者もいる。特に学習者Dは、日本の高校（インターナショナルスクール）で1年間日本語を勉強し、母国の大学で1年間日本語を学び、さらに日本への短期留学の経験もあるという。学習者の多くは働いており（特にサービス業が多い）、仕事上で日本人と接触する機会が多いようである。また、大部分が既婚者であり（日本人の配偶者で、今後もこの地域に定住する学習者が多い）、現在は仕事をしないで子育てに専念している学習者もいる。

(46)

鳴門日本語教室では、このような多種多様な学習者の現状に可能な限り配慮した日本語支援活動を行っており、学習者による評価も高いのであるが、一方で、以下のような点が問題点として残っているように思われた。

(3) 鳴門日本語教室の問題点

- a. 学習者のニーズと教科書を使った積み上げ型の授業内容が合っていない。
- b. 学習・教室環境が良くない。(学習者の増加で部屋が不足している。)
- c. 授業当日になるまで学習者の出欠を把握できない。

このうち、(3 a)は全国の地域日本語教室に見られた問題点の(1 b)と共通している。そこで、今回の授業実践では特に「学習者のニーズ」という側面に焦点を当て、問題の解決を図ることを目指した。

2. 授業の開発

2. 1. 準備段階の取り組み

2012年5月から7月初めにかけて、地域の学習者のニーズやそれに合致する授業作りについて協議を重ねた。多様な学習者で構成される地域日本語教室では、その地域の状況に応じた、また学習者のニーズを反映した日本語学習や支援が求められる。近年、各地でも様々な取り組みが行われており、その地域の学習者にあった授業や教材作りがなされている^(注6)。そこで、本研究でも、これまでの授業を見直し、学習者の日本語の使用実態や希望に沿った授業の開発を行うことを目指し、鳴門日本語教室に通う学習者の興味や関心を知るためのニーズ調査を行うことにした。

2. 2. ニーズ調査

ニーズ調査に先立ち、学習者のニーズの予想を立てた。地方の、地域の教室ということもあり、方言の問題は大きいのではないかと思われた。また、普段の生活における問題(病院や役所関係、子どもの教育、仕事などの場面におけることばの問題)なども挙がってくるのではないかと予想された。そのため、日常生活で困っていることは何か、どのような場面で使う日本語を学習したいか、また、方言が分からなくて困った経験がないか、方言を学びたいかなどを項目として立て、調査を行った。

ニーズ調査の対象となったのは(2)の9名である。鳴門日本語教室はいわゆる「学校」ではなく、毎回コンスタントに学習者が参加してくるとは限らないため、2012年7月と10月の

二度に渡ってアンケート調査を実施した。調査には主に自作のアンケート用紙を使用したができるだけ多くの情報を引き出すため、また、学習者の日本語力にばらつきがあるため、補足的に聞き取りでも調査を行った。その結果、方言を学習したいという希望は全員から挙げたものの、それ以上に仕事などで使う日本語を学びたいという希望が圧倒的に多かったため、今回は「場面」や「機能」を重視した授業内容を行うことにした。

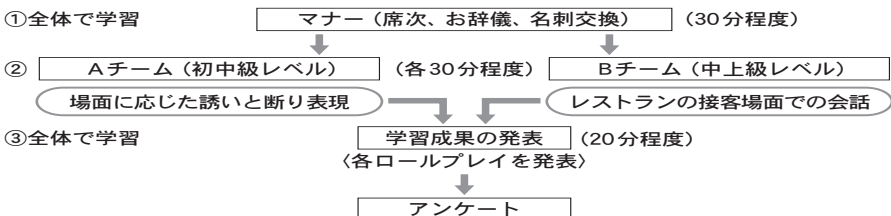
2. 3. 場面や機能を重視したシラバスとロールプレイ

今回の授業実践では、学習者にサービス業従事者が多いことから、接客場面および職場などでの敬語使用を扱うことにした。内容を考える過程では、中居他(2005)、金子(2006)、小池他(2007)、ポイクマン他(2006)などの場面・トピック・機能シラバスを採用しているテキストを参考にした。これまで、鳴門日本語教室の初級および中級クラスでは、主に『みんなの日本語 初級Ⅰ』『みんなの日本語 初級Ⅱ』を用いて文型を積み上げていくという方法で授業を行ってきた。これは確かに初中級において多く行われている方法であるが、文型の学習だけでは、どのような場面でどのような表現が使えるかということを学習者がつかむのは難しい。実際、初級や中級段階で学んだ表現を会話の中でうまく使えないという学習者も多い。そこで、学習者が場面と結びついた様々な表現を効果的に学習する第一歩として、場面と機能を重視した、タスク先行型のロールプレイを取り入れた授業を行うことにした。中居他(2005)では、ロールプレイを用いた会話練習を行い、与えられた状況の中で課題を達成していくことで、コミュニケーション能力の向上にもつながると指摘されている。今回、学習者がこれまでと異なった授業を体験することで、今までに習った文型や新たに学習する表現が、どのような場面でどのように使われるかを意識するきっかけとなるような授業作りを目指した。

2. 4. 授業の構成

学習者のニーズ、レベルを考慮し、90分の授業を(4)のような3部構成とした。

(4) 授業の流れ



(48)

普段は日本語のレベルごとに分かれて授業を行っているため、クラスの異なる学習者同士が交流する機会は少ない。そのため、今回の取り組みでは、全体で活動する時間を最初(①)と最後(③)に設けることにした。そして、文型や表現を確認してロールプレイを行う時間(②)では、日本語力とニーズにより2つのチームに分け、各レベルに合った活動を行うことにした。Aチーム(初中級レベル)は、今回の授業実践の直前に『みんなの日本語 初級Ⅱ』などで尊敬語や謙譲語の学習を終えたばかりの学習者を対象としている。一方、Bチーム(中上級レベル)は、日本での滞在期間が長い会社員・サービス業従事者を対象としている。

90分の授業の各段階の目的、内容、目標は(5)のとおりである。

(5) 各段階の目的、内容、目標

	目的	内容	目標
①	ビジネス場面でのマナーを学ぶ	・席次 ・お辞儀 ・名刺交換	・席次についての知識を得る ・お辞儀の種類を知る ・名刺の受け渡しができる
②	レベルとニーズに合った会話練習(ロールプレイと表現の学習)	Aチーム(初中級レベル): 敬語を使って目上の人を誘ったり、丁寧に断ったりする Bチーム(中上級レベル): レストランの接客場面で適切な会話を行う	Aチーム(初中級レベル): 状況に応じた適切な表現や敬語が使える Bチーム(中上級レベル): サービスの敬語を使い、接客ができるようになる
③	学習したことを実践する	A・B各チームがそれぞれ学んだことを、ロールプレイ形式で発表する	・互いの成果を確認する ・日本語での会話を聞いて理解する

以上のような目的や目標をふまえて、2012年11月半ばから12月初旬にかけて、授業案と教材の作成を行った。その際には、以下の点を特に重視した。

(6) 本実践授業で重視したこと

- 知識を詰め込むのではなく、学習者が体験して「使える」と感じられる授業にすること。
- ことばだけでなく、日本のマナーや習慣など文化的な側面も学ぶことができること。
- 「場面や状況」と「それにあった日本語の使用」を意識してもらうこと。
- 日本人ボランティアにも積極的に参加してもらい、共に活動できること。

また、教材にイラストやレアリアを多く使用し、より実際の状況に近い場面設定にしたり、

視覚的な情報を多く取り入れることで、学習者が興味を持って楽しく学べるように工夫した。

3. 授業実践の内容

授業実践の概要は以下のとおりである。

(7) 日時

2012年12月12日(水) 19:00-20:30

(8) 学習者のチーム分け (cf.(2))

- a. A チーム (初中級レベル) : (6名)
学習者 A、B、C、D、E、F
- b. B チーム (中上級レベル) : (2名) ^(注7)
学習者 G、H

(9) 授業担当者 (cf.(5))

- a. ビジネス場面でのマナーを学ぶ ①
西條
- b. レベルとニーズにあった会話練習 (A チーム (初中級レベル)) ②
石川・児島
- c. レベルとニーズにあった会話練習 (B チーム (中上級レベル)) ②
宇都宮・曹
- d. 学習したことを実践する ③
西條・石川・児島・宇都宮・曹

3. 1. ビジネス場面でのマナーを学ぶ (19:00～19:25)

①の「ビジネス場面でのマナーを学ぶ」というパートは、「第1部：席次」、「第2部：お辞儀」、「第3部：名刺交換」の3部構成とした。対象者は(8)の学習者全員であり、日本人サポーター (市民ボランティア) にも名刺交換等の場面で適宜参加してもらった。教科書は用いず、以下の(10)–(12)の教材をもとに授業を進行した。

(50)

(10) 「ビジネス場面でのマナーを学ぶ」配布資料①（様々な場面の席次）（注8）



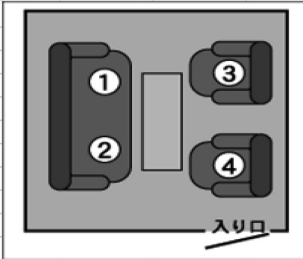
Let's try Japanese culture!



Activity1

かみざ しもざ
上座と下座

おうせつしつ
①応接室

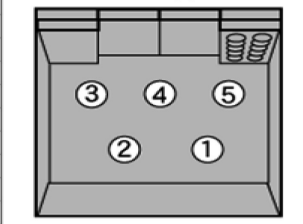


くるま
②車



③エレベーター

エレベーター出入口



④タクシー

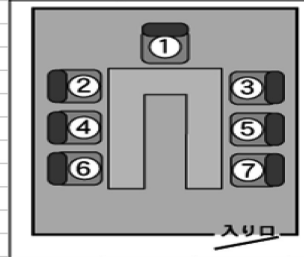


わしつ
⑤和室

社内など、同じグループでの和室宴会



かいぎしつ
⑥会議室



(11) 「ビジネス場面でのマナーを学ぶ」配布資料②（お辞儀）^(注9)

Activity2	おじぎ	
<p>さいけいれい かんしゃ 最敬礼は感謝をしたり、 ねが お願いをしたり、とても えら ひと あ 偉い人に出会ったときに するお辞儀です。</p>	<p>けいれい きやく き じょうし 敬礼はお客様が来たとき、上司 (ボス)に頼まれたときに使うお辞 儀です。ビジネスでは、一番使う お辞儀です。</p>	<p>えしゃく 会釈は、すれちがうと き、お茶を出すときに つか じ ぎ 使うお辞儀です。</p>

(12) 「ビジネス場面でのマナーを学ぶ」配布資料③（名刺交換）

<p>Activity3 名刺交換 めいし こうかん</p>
<p>A: はじめまして。 さいじょう ゆうと と 申します。 よろしく お願い いたします。 めいし さ だ (名刺を差し出す)</p>
<p>B: ~と申します。 よろしく お願い いたします。 めいし さ だ (名刺を差し出す)</p>
<p>*注意 Attention ちゅうい</p>
<p>①自分が さきに 名刺を わたして ください。 じぶん さきに めいし</p>
<p>②名刺を もらったら つくえ うえ 机の上において ください。 めいし もらったら つくえ うえ</p>
<p>③机がない 時は て 手に もって ください。 つくえ ない とき て</p>

3. 1. 1. 席次

まず、上座と下座についての説明を行った後、場面を「応接室」と設定し、学習者を2つのグループに分け、それぞれのグループに席次を意識して実際に座ってもらうという活動を行った。その際、上下関係を明確にするために、最も「偉い」役を演じる学習者にはその学習者の出身国の大統領のお面をかぶってもらい、残りの学習者には上下関係を詳細に設定するために、数字を書いたカードを配布した。筆者らからは特に助言をせず、学習者たち自身で上座と下座を考えて席に座るという方法を採用したが、どちらのグループも席次通りに座ることができていた。これは、学習者の出身国にも席次のような文化が存在することや、学習者が日常生活のどこかで席次についてすでに学習していることが要因であると考えられる。その他、「車」と「和室」の座席図を描いた模造紙を提示し、学習者が席次順に答えるという活動を行ったが、どの学習者も正しい答えを出すことができていた。

<席次の授業の様子>



3. 1. 2. お辞儀

まず、お辞儀には「会釈」「敬礼」「最敬礼」の3種類があり、角度によって分類されていることを、デモンストレーションを交えながら説明した。ただ、「会釈」「敬礼」「最敬礼」の区別は学習者が生活を送る上ではそれほど重要ではないと思われたため、説明はどのような場面で3種類のお辞儀を使い分けるか等、最小限に留めておいた。次に、実践として、筆者らがお辞儀の手本を提示した後で、学習者に反復練習をさせた。学習者が適切にお辞儀を行えているかどうかは、筆者らの他、日本人サポーターにも確認してもらった。どの学習者も概ねできているようであった。

＜お辞儀の授業の様子＞



3. 1. 3. 名刺交換

まず、学習者の母国に名刺交換があるかどうかを尋ねた後、実際に名刺交換をしたことがあるかどうかを確認した。学習者からは「名刺交換をしたことが無い」「名刺交換は知っているが日本式の名刺交換は知らない」という声が上がった。その後、筆者らのうち2人が次のようなデモンストレーションを行った。

(13) デモンストレーションの内容

日本人 A 「はじめまして。」

日本人 B 「はじめまして。」

日本人 A 「西條結人と申します。よろしくお願いいたします。」

(名刺を差し出す)

日本人 B 「児島由佳と申します。よろしくお願いいたします。」

(名刺を差し出す)

「(氏名) と申します」という文型は学習者にとって難しいことが予想されたため、入念に反復練習を繰り返した。文型練習が終わると、ペアになって名刺交換の練習を行った。その際、実際の名刺交換の場面に近づけるように、6枚の名刺を学習者ひとりずつに配布し、名刺1枚を交換するように指示した。どのペアにも、日本人(筆者ら・サポーター)がつき、名刺交換に対する理解度を確認した。最後に、残り5枚の名刺すべてを学習者と日本人との間で交換させた。一部の学習者に積極性が見られなかったが、すべての学習者が5枚の名刺を交換することができていた。活動終了後、いくつかのペアをランダムで指名して名刺交換

(54)

を实践させ、学習内容の理解度を確認した。

3. 2. レベルとニーズにあった会話練習 (A チーム (初中級レベル)) (19:25 ~ 20:00)

(4)、(5)の②の「レベルとニーズにあった会話練習」における A チーム (初中級レベル) の学習項目と学習内容は(14)、(15)のとおりである。

(14) 学習項目

- a. 敬語表現を使って、目上の人を誘う。
- b. 理由を言いながら、相手に失礼にならないように断る。

(15) 学習目標

- a. 状況に応じた適切な表現の使用ができる。
- b. 目上の人からの誘いに対して、上手に断ることができる。

授業対象者は (8 a) の 6 名であり、仕事に従事している学習者と主婦業の学習者が半々であったため、職場でも日常生活でも使える「目上の人を誘う」「理由をつけて断る」を学習項目とした。特に、断り表現に関しては、はっきり「行けない」などの意思表示をすると相手に失礼になることがあるため、言葉を濁す表現 (「明日は出かける用事があるので…」など) のような「日本的な」言語表現を身に付けさせることを目指した。

3. 2. 1. 先行ロールプレイ

まずは、導入として「誘う」の意味や使い方について学習者に問い、ロールプレイの目的の確認を行った。次に、(16)のロールカードを学習者に渡し、カードの内容が分かるかどうかを確認した。

(16) 初中級ロールカード①

A: 学生 / 部下

12月21日(金)にみんなで忘年会をしようと思っています。Bさん(先生 / 上司)も来てほしいので、誘ってください。

B: 先生 / 上司

Aさんの話を聞いてください。あなたは12月21日(金)に友達と会う約束があります。

その後、学習者同士のペア（3組）でロールプレイを行った。この時は、表現や誤用の指摘は行わず、学習者が考え付いたままを自由に発言してもらい、筆者らは誤用をメモに取るだけに留めた。学習者の「誘い」発話の中には、「先生も来ますいいです」のような文法的な誤りや「みんなで忘年会をしようと思っています」のようなロールカードをそのまま読み上げただけのものが含まれていたため、これらを次の「表現・語彙の確認」の際の導入に用いた。

3. 2. 2. 表現・語彙の確認

ペアでのロールプレイが終わった後、(17)の資料を配布し、誤用の確認をしながら表現・語彙の確認（「話を開始するときは「今ちょっとよろしいですか」を用いる」「断る理由を言った後には、残念な気持ちを述べる言葉をもう一度入れても良い」など）を行った。その後、学習内容を踏まえたモデル会話(18)をホワイトボードに貼り、筆者らがモデル例を示し学習者が読み上げるという活動を行った。

(17) A チーム（初中級レベル）配布資料①（表現・語彙）

今日の表現・語彙	2012. 12. 12
1. 目上の人を誘うとき	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>～んですが、～ませんか。</p> <p>～んですが、(ぜひ) 参加して いただけませんか。</p> <p>～んですが、Bさんも 一緒に いかがですか。</p> </div>	→26 課 →41 課
うちでパーティを するんですが、Bさんも いらっしやいませんか。	
☆明日、木村さんと 映画を 見に行きます	
_____ んですが、_____ (さん)も 一緒に いかがですか。	
2. 丁寧に断る	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>すみません、明日は ちょっと、(理由) ので…。</p> <p>それが…、明日は ちょっと、(理由) ので…。</p> </div>	→39 課
すみません、明日は ちょっと、 <u>天候</u> から 変だから 来るので…。	
☆目上の人・先生と 会わなければなりません	
それが…、_____ は ちょっと、_____ ので…。	
☆今日・風邪を 引いて、調子が 悪い	
3. 残念な気持ちを表す表現	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>残念なんですが…。</p> <p>申し訳ないのですが…。</p> </div>	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ぜひ、行かせて いただきたいんですが…。</p> <p>また今度、お願いします。</p> <p>また今度、誘って いただければ と思います。</p> </div>	→48 課

(56)

(18) A チーム (初中級レベル) 配布資料② (モデル会話)

**はな
話してみよう!**

1 (Aさん:日本語を勉強している学生、山田先生:日本語の先生)

A : 山田先生、ちょっとよろしいですか。

山田: はい、何ですか。

A : 来週の金曜日に、忘年会をするんですが、

よかったら先生もいらっしゃいませんか。

山田: 忘年会ですか。いいですね。でも、来週の金曜ですか……。

すみません、その日は(金曜は)予定があるので…。

A : そうですか。

山田: 残念なんだけど…。また今度、お願いしますね。

A : はい。次のときはぜひ参加してください。

山田: ええ。ありがとう。

3. 2. 3. 後行ロールプレイ

最後に、全体での発表会 ((4)、(5)の③) に向けて、以下のロールカード②、③を用い、ペアでロールプレイを行った。

(19) 初中級ロールカード②

A : (日本語を勉強している学生)
日本語クラスみんなで、来週カラオケに行きます。
日本語の先生の B さんを誘ってください。

B : (日本語の先生)
あなたは日本語クラスの先生です。
学生の A さんの話を聞いてください。
あなたはその日は _____ ? _____ から、行けません。
それを A さんに話してください。

(20) 初中級ロールカード③

A: (会社員)

あなたは映画のチケットを2枚もらいました。
来週の週末に行こうと思っています。
同じ会社のBさん(後輩)を誘ってください。

B: (会社員)

Aさんの話を聞いてください。
あなたはその日は_____? から、行けません。
それをAさんに話してください。

筆者らは、カードの内容理解を補助するだけでなく、ロールプレイ中に見られた誤用や補足すべきところを確認しながらメモを取り、学習者の理解が深まるよう指導を行った。学習者の中には、自ら場面を設定して誘い表現を言えたペアもあれば、ハンドアウトの内容をリピートして内容理解に重点を置いたペアもあった。

< Aチーム (初中級レベル) の授業の様子 >



3. 3. レベルとニーズにあった会話練習 (Bチーム (中上級レベル)) (19:25 ~ 20:00)

(4)、(5)の②の「レベルとニーズにあった会話練習」におけるBチーム (中上級レベル) の学習項目と学習目標は①、②のとおりである。

(58)

(2) 学習項目

サービス敬語

(2) 学習目標

サービス敬語を使い、接客ができるようになる。

授業対象者は(8b)の2名であり、いずれも中国人である。それぞれの学習者に1名ずつ日本人サポーター(市民ボランティア)を付けてペアとし、三回のロールプレイ練習を通して、学習者に正しい「サービス敬語」を身に付けさせることを目指した。

3. 3. 1. タスク先行ロールプレイ

ロールプレイではレストランという設定で接客を行いながら会話を行うため、まず、メニューや皿といった小道具を用いることを確認し、続いてレストランの入口の場所や席につく場所などを詳細に指示した。その後、(23)のロールカード①を学習者と日本人サポーターに渡し、カードの内容が理解できたことを確認した後、ロールプレイを開始した。

(23) 上級ロールカード①

<p>A: あなたはレストランの店員です。お客様を席まで案内し、注文を取ってください。 その後、料理を運んでください。</p> <p>B: あなたは客です。二人で来店します。レストランには予約はしていません。AランチとBランチを注文してください。</p>

ロールプレイの一回目は、表現・文型について筆者らからは何も情報を与えないことにし、学習者に独力でロールプレイをさせた。ロールプレイ中、筆者らは、学習者が使えていない敬語や表現を確認しながらホワイトボードに書いておいた。

3. 3. 2. 表現・文型(状況に応じた話し方や関連語彙を学ぶ)

学習者が使えていない敬語や表現には以下のものがあつた(注10)。

(24) 学習者が使えていない敬語や表現

a. 決めたら、お呼びください。(お決まりになりましたら、お呼びください。)

- b. 禁煙席ですか。喫煙席ですか。(禁煙席と喫煙席とどちらがよろしいでしょうか。)
 c. 分かりました。(かしこまりました。)
 d. お召しください。(お召し上がりください。)

そこで、これらの点について、丁寧な表現を使えるよう、一つずつ指導した。

3. 3. 3. 後行ロールプレイ及び「表現・文型」

次に、学習者によって異なるロールプレイを行わせるため、(25)のロールカード②を学習者 G のペアに、(26)のロールカード③を学習者 H のペアにそれぞれ渡した。そして、カードの内容や道具(メニュー、皿)を確認した後、学習した敬語や丁寧な表現を用いて、日本人サポーターを相手に接客のロールプレイを行わせた。

(25) 上級ロールカード②

A: あなたは店員です。お客様を席まで案内し、注文を取ってください。その後、料理を運んでください。忙しい時に、お客様から取り皿を取り換えてほしいと言われるので、新しいお皿を席まで持って行ってください。

B: あなたはお客様です。料理を注文しますが、取り皿が汚れたので取り換えてもらいたいです。店員に言って取り換えてもらってください。

(26) 上級ロールカード③

A: あなたは店員です。「〇〇様 4 名」の予約をしているお客様が来店します。席まで案内し、注文を取ってください。その後、料理を運んでください。追加注文があれば、その接客もしてください。

B: あなたはお客様です。レストランに「〇〇、4 名」で予約しています。料理を注文しますが、食事中にも追加注文をしてください。

ロールプレイ中、間違いや補足すべきところを確認しながらホワイトボードに記録しておいた。学習者の間違いや補足すべき例としては、以下のものがあつた。

(60)

(27) 学習者の間違いや補足すべき例

- a. 案内します。 (ご案内いたします。)
- b. 申し訳ないですが、(申し訳ございません。)
- c. B ランチです。 (B ランチでございます。)
- d. 該当表現なし。 (すぐにお取り替えますので、少々お待ちください。)

ロールプレイ②、③終了後、使えていなかった敬語や表現を確認した。その際、学習者が覚えていなかった文型や補足すべきところに重点を置いてリピートさせた。

<Bチーム(中上級レベル)の授業の様子>



3. 4. 学習したことを実践する (20:00 ~ 20:20)

それぞれ異なる活動を行ったAチーム(初中級レベル)とBチーム(中上級レベル)の授業の内容や成果を互いに見せ合うために、そして日本語での会話を聞いてどこまで内容を理解できるかを確認するために、それぞれのチームに学習内容を実践して発表させた。

3. 4. 1. Aチーム(初中級レベル)

自ら場面を設定して目上の人を誘うことができたペアやハンドアウトを見ながら発表したペアなど、習熟度に多少の差が見られたものの、授業で学習したことはできていた。しかし、全体的に時間がなかったため、一つ一つの項目にあまり時間をかけることができなかった。また、各ペアのロールプレイが終わるたびに語彙・表現を確認したのであるが、反復練習と誤用の確認に留めてしまったため、一つの表現を確認した後、それを使ってペアで自由に発話させるなど、もう少し自由度のある発話ができるように工夫しても良かったかもしれない。

ペアによる習熟度に差は見られたものの、各ペア（3ペア）に1人サポーターとして日本人をつければ、それほど学習者に負担が掛かることもなかったはずである。

3. 4. 2. Bチーム（中上級レベル）

学習者G、Hが全員の前でロールプレイ②、③を行った。学習者Gは少し緊張していたため、数か所間違いが出ていたが、サービス敬語は大方使えるようになっていた。学習者Hはサービス敬語を上手く使って接客ができるようになっていた。全体発表終了後、本項目のまとめとして(28)、(29)を学習者に配布した。

(28) Bチーム（中上級レベル）配布資料①（文型・表現）

「サービスの敬語」学習者用のハンドアウト

文型・表現

- 「お/ご〜たら」「お/ご〜ください」 **客の動作には尊敬語を使う**
 例1：お決まりになりましたら、お呼びください。（cf.決まったら、呼んでください。）
 例2：お困りになりましたら、いつでもご相談ください。
- 「お待たせ（いた）しました。」 **相手を持たせたことについて、ひとこと謝る表現**
 例：お待たせいたしました。〇〇料理のお客様は？
- 「かしこまりました。」（cf.わかりました。） **注文を受ける時に使う敬語**
- 「少々お待ちください（ませ）。」（cf.少し待ってください）
- 「申し訳ございません。」（cf.すみません。／申し訳ありません。）
 例1：申し訳ございません。すぐに確認してまいります。
 例2：申し訳ございません。すぐに、お取り替えいたしますので、少々お待ちください。
- 「（メニュー）でございます。」（cf.（メニュー）です。）
 「夜のメニューでございます……」（cf.昼は注文できません）
事情や理由を述べる
 相手にとって好ましくないことを直接的に言うことは、避ける。
 文末を言い切らない形がよく使われる。
 例：ただいま会議中でして……。申し訳ありません。
- 「ご注文を繰り返させていただきます。」 **注文の内容を確認する時に使う敬語**
- 「（お飲み物は）いかがいたしましょうか。」（cf.飲み物はどうしますか。）
相手の意向を尋ねる時に使う敬語
 例1：ご注文はいかがいたしましょうか。
 例2：来週の会議の資料ですが、いかがいたしましょうか。

(62)

(29) Bチーム (中上級レベル) 配布資料② (モデル会話)

モデル会話

また あなた 新しいお客さんが来ました。お客さんを席に通して……。

マリア：こちら、メニューでございます。お決まりになりましたら、うかがお伺いいたします。
女性客：はい。
……

女性客：ちゅうもん注文、ねがお願いします！

マリア：お待たせいたしました。

女性客：この春の魚コースを2つお願いします。

マリア：かしこまりました。コーヒーか紅茶をお選びいただけますが……。

女性客：じゃあ、コーヒーを2つ。それから、このスペシャルスープありますか。

マリア：こちらのスープ、きょうしゆく恐縮ですが、ただ今準備中でございます……。

女性客：ああ、そうですか。残念。

マリア：夜のメニューでございますので……もう わけ申し訳ございません。お酒など、さけお飲み物はのいかがいたしましょうか。

女性客：いいえ、結構です。

マリア：かしこまりました。それでは、ご注文を繰り返させていただきます。春の魚コースをお2つ、しょうじょうコーヒーをお2つですね。少々お待ちくださいませ。

4. 考察

授業実践後、筆者らは授業の振り返りを記録にまとめ、学習者には授業評価アンケートを行った。それらを用い、今回の授業実践の成果と今後の課題について考察する。

4. 1. 筆者ら自身による振り返り

筆者ら自身が挙げた振り返りの内容を「学習内容に関するもの (=30)」「授業の進め方に関するもの (=31)」「グループ分けに関するもの (=32)」の3つの項目に分け、今回の授業実践の成果と今後の課題について考察する。

(30) 学習内容に関するもの

- a. 一回の授業で全ての学習者のニーズをカバーすることは難しい。
- b. 学習者にとって日本文化を知るきっかけとなった。

ニーズ調査を行って臨んだ今回の授業実践であったが、一回の授業で全ての学習者のニーズに沿った授業案を考えることに苦労した。地域日本語教室における学習者のニーズは多様であり、すべてのニーズに対して一度で網羅的に対応するのは難しい。だからこそ、このよ

うな取り組みは一度きりで終わるのではなく、今後も継続的に行うことが重要である。

(31) 授業の進め方に関するもの

- a. 通常の授業より学習者の自由な発話が多い授業をすることができた。
- b. チームティーチングだったため、より細やかな指導ができていた。
- c. A チーム（初中級レベル）は中国人学習者と英語圏（アメリカ人、カナダ人）学習者をペアにすることで、母語に頼らず目標言語（日本語）のみで会話をさせることができた。
- d. 市民ボランティア（日本人）を活かしたことで、学習者は授業者以外の日本語に触れることができた。特に、B チーム（中上級レベル）では、市民ボランティアにレストランの客の役を演じてもらったことで、より現実に近い状況で会話を行うことができた。
- e. 受け身の学習者が積極的にロールプレイ活動へ参加するにはどうすればよいか。
- f. 日本人ボランティア、学習者がロールプレイという方法に慣れていなかった。

今回の授業実践では、ロールプレイを取り入れたたり日本人ボランティアを活かすなど、これまでの授業であまりなかった方法を学習者に提示することができた。また、いつもの教科書を用いた文型積み上げ型の授業ではなく、学習者たちが言いたいことを言える場を設定したことにより、学習者の生き生きとした表情を見ることができた。しかし、初めてロールプレイ活動をする学習者や消極的な学習者は、ロールプレイ活動に戸惑っている様子が見られた。授業実践の前にロールプレイの活動を取り入れた授業を行って慣れさせておいたり、学習者が話しやすい雰囲気作りをもう少し念入りに行っておくなどの工夫が必要であったと言える。

(32) グループ分けに関するもの

- a. いつも担当していない学習者の能力を把握することが難しかった。（他のクラスの事前観察が足りなかった。）
- b. 同じグループでも習得度合いが違うため、どのように対応すべきかを考えておくべきであった。

筆者らのほとんどが、普段の授業では中級クラス（cf. (2)および注3）を担当している。そのため、他のクラスの学習者のレベルがよく把握できないまま授業を行ってしまったのは反省すべき点であった。混合クラスで授業を行う際には、一人一人のレベルを前もって観察し、

(64)

使用語彙や文型、学習者の性格などを把握しておく必要がある。

4. 2. 学習者による授業評価をもとにした考察

授業の後に行った授業評価アンケートのコメントを、「ニーズについて (=33)」「今回学習したことが実生活で使用できるかについて (=35)」「授業の進め方について (=37)」「今後の授業内容について (=38)」の4つの項目に分けて考察する^(注11)。

(33) ニーズについて

全員が自分のニーズに合っていたと回答した。(A チーム (初中級レベル) 学習者6名、B チーム (中上級レベル) 学習者2名)

(34) 主な理由

- a. 職場で使えるから。(A チーム (初中級レベル) 学習者)
- b. 実生活で使えるから。(A チーム (初中級レベル) 学習者)
- c. 以前分からなかったことが今は分かるようになったから。(A チーム (初中級レベル) 学習者)
- d. 正しい日本語が使えるようになったから。(A チーム (初中級レベル) 学習者)

鳴門の日本語教室を含め全国の地域日本語教室での問題点である「授業内容が学習者のニーズと合っているかどうか」という点で、筆者らは、学習者全員のニーズに応えることは難しいと感じていた。しかし、学習者の身近なテーマを扱い、実際の生活で使えるような場面を設定したことで、学習者からは、自分のニーズと授業内容が合っていたという肯定的なコメントが多く見られた。

(35) 今回学習したことが実生活で使用できるかについて

- a. もう少し練習が必要である。(A チーム (初中級レベル) 学習者1名、B チーム (中上級レベル) 学習者1名)
- b. 使える。(A チーム (初中級レベル) 学習者5名、B チーム (中上級レベル) 学習者1名)

(36) 主な理由^(注12)

- a. 現実の使用場面に近いロールプレイで勉強したから。(A チーム (初中級レベル) 学習者)

- b. 学校で先生方と丁寧に話すために敬語を身に付ける必要があるから。(A チーム(初中級レベル) 学習者)
- c. 偉い人と話す必要がしばしばあり、敬語を練習しておく必要があるから。(A チーム(初中級レベル) 学習者)
- d. 70%くらいできるようになったから。(B チーム(中上級レベル) 学習者)

8名のうち6名の学習者が、今回の授業の練習時間や活動で学習したことが使えると回答している。もう少し練習が必要だと回答している残りの2名の学習者のためには、授業内で繰り返し練習する時間を増やしたり、自宅で復習できるワークシートを配布するなどの対応をするべきであった。

(37) 授業の進め方について

- a. 表現や語彙学習後、会話練習(ロールプレイ)をしたので、授業の内容をうまく理解することができた。(A チーム(初中級レベル) 学習者)
- b. 使っている日本語に間違いがあった時、直していただいて良かった。(A チーム(初中級レベル) 学習者)
- c. 普段はあまり敬語を使わず、敬語は聞くと意味がわかる程度だったが、実際に使ってみたところ、とても難しく感じた。(B チーム(中上級レベル) 学習者)

ロールプレイを用い、場面を設定して会話練習を行うことで授業内容の理解が深まったという回答があり、学習者はロールプレイ活動を肯定的に捉えている。その一方で、敬語の会話は難しいと実感した学習者もいた。これまでの文法積み上げ型の学習では、現実に近い会話の活動が少なく、教科書を学習すれば何となく敬語が使えるような気持ちになっていたのではないだろうか。それが、今回の授業で実生活に近い場面の会話を行ったことで、その文型が使えない場面に出くわしたのだと考えられる。そのような場面を軽減するためにも、実際の現場に近い会話練習ができるロールプレイは有効な手段である。

(38) 今後の授業内容について

- a. 今までの教科書を用いた授業よりロールプレイを用いた会話中心の授業を希望する。(A チーム(初中級レベル) 学習者5名、B チーム(中上級レベル) 学習者2名)
- b. 学習者の会話力を高めるために、今後の授業の内容は日常生活の様々な場面に応じた会話練習に重点を置いた方がいい。(A チーム(初中級レベル) 学習者)
- c. 今までの教科書を用いた授業とロールプレイを用いた会話中心の授業の両方を希望す

(66)

る。(A チーム (初中級レベル) 学習者)

(39) (38a、b) の主な理由

- a. 実用性が高い練習ができたから。(A チーム (初中級レベル) 学習者)
- b. すごくよかったから。(B チーム (中上級レベル) 学習者)

(40) (38c) の主な理由

教科書では新しい文型や言葉が勉強できる。予習で教科書を使い、授業では教科書の中の文型などで話したりやロールプレイをしたりすると良いと思うから。(A チーム (初中級レベル) 学習者)

今後は、文型積み上げ型と会話中心の活動のバランスを考え、学習者らが実生活に使えるような文型や表現、言葉を取り上げ、授業を行う必要があるだろう。

5. 終わりに

今回の授業実践は一度のみの試みであったため、すべての学習者のニーズに沿うことはできなかったが、「マナー」「サービス敬語」「誘う・断る」の授業内容は学習者から好評を得た。今後、学習者のニーズに合った授業を継続的に取り入れていくことが不可欠であるし、より細かく個々のニーズに対応していくことも必要であろう。鳴門日本語教室の学習者はできるだけ生活で直接役に立つ日本語を学びたいという希望があるため、今後も教科書を用いた積み重ね学習とともに、学習者の希望によって「許可する・許可を求める」「謝る・苦情を言う」「電話での会話」などのような機能シラバスの・場面シラバスの視点の内容も入れて授業を行っていきたい。

また、今回は「学習者のニーズ」に焦点を当てて授業実践を行ったが、学習者のニーズの中には支援者によっては対応できないものもあることが想定される。鳴門日本語教室の場合には、主に支援者が学生ボランティアであるため、ビジネス日本語やビジネス場面での文化的背景を学習者に教えることは難しい。それを解決するためには、社会人(経験者)の日本人サポーターとの密な連携が必要不可欠である。様々な職業経験を持った日本人サポーターが授業に入り、活躍することで、学習者がより効率よく日本語を学習することが可能になるだろう。さらには、多文化化する地域の中において、異なる文化背景を持つ学習者と地域の人々が交流する場として、今後、地域日本語教室が多文化共生社会の拠点となることが期待される。

最後に、本実践では「新たな授業の開発」までは到達することができなかった。しかし、学習者が生活でより直接的に役に立つ日本語を学習し、運用するためには、地域の特性に合ったオリジナルの教材を作成することも重要である。今後の課題として考えていきたい。

注

- (1) 本稿は、平成 24 年度「教育実践フィールド研究（国語科）」の日本語教育分野の研究授業（テーマ：「地域日本語教室における支援のあり方について」）の実践報告である。実践にあたり、様々なご助言をくださった鳴門教育大学の先生方、広島大学の永田良太先生、徳島大学の山木真理子先生、貴重な実践の場をご提供くださった鳴門ダイバーシティクラブの前田敏明氏、サポーターとして授業の補佐を受け持ってくださいました市民ボランティアの方々、そして何より、私たちの試行錯誤の授業に最後まで付いてきてくださった学習者の皆さんに感謝申し上げる。もちろん、本稿における不備や誤りはすべて筆者らの責任である。
- (2) 鳴門日本語教室の学習者を対象とした研究調査には、他に永田・山木（2012）がある。
- (3) 授業内容は年度や時期によって多少異なるが、基本的には次のような内容を行っている。
 - a. 入門：『ほんごこれだけ！1』を用いた生活日本語
 - b. 初級：『みんなの日本語 初級Ⅰ』の第1課～第25課
 - c. 中級：『みんなの日本語 初級Ⅱ』の第26課～第50課
 - d. 上級：支援者作成のオリジナル教材を用いたビジネス日本語など
- (4) 「日本在住歴」「日本語学習歴」は2012年12月当時のものである。
- (5) 日秘文化会館（Centro Cultural Peruano Japonés (CCPJ)）とは、1967年5月12日にペルーと日本の文化交流を目的としてリマ市に建てられたものである。中には日本食レストラン、資料館、図書館などが備えられており、そこで日本の文化や日本語を学ぶことができる。
- (6) 松田他（2011）で紹介されている「松江地域の文化事情を『やさしい日本語』で紹介した読み教材」など。
- (7) B チーム（中上級レベル）には学習者Ⅰも属するはずであったのだが、当日出席できなかったため2名となった。
- (8) この資料の作成に当たっては以下の website を参考にした。
「くちコミくらぶ知りたい講座事務局 ビジネスマナーと基礎知識 席次・席順」
(<http://www.jp-guide.net/businessmanner/business/sekiji.html>)
- (9) 主婦の友社編（2002）p.163より。
- (10) （ ）内の表現は正解（丁寧な表現）の一例である。

(68)

- (1) アンケート用紙は学習者の母語（英語と中国語）で作成した。ほとんどの学習者が母語で回答しており、以下の学習者からのコメントは筆者らが日本語に翻訳したものである。
- (2) (35a) については特に理由が述べられていなかったため、ここに挙げたものはすべて(35b) についてのものである。

引用・参考文献

- 庵功雄（2010）『にほんごこれだけ！1』、ココ出版
- 池上摩希子（2007）「地域日本語教育という課題—理念から内容と方法へ向けて—」、『早稲田大学日本語教育研究センター紀要 佐藤洋子教授退職記念号』20、早稲田大学日本語教育研究センター、pp.105-117
- 井上史雄（1999）『敬語はこわくない』、講談社現代新書
- 金子史朗・深田みのり・黒川美紀子・宮下智子（2006）『マンガで学ぶ日本語会話術』、アルク
- 金子広幸（2006）『にほんご敬語トレーニング』、アスク
- 釜淵優子（2012）『實用敬語初級篇（漫画で分かる実用敬語 初級編）』、アルク
- 川端一博（2013）「国内の日本語教育の現状」、『日本語学』32-3、明治書院、pp.4-17
- 北原保雄編（2004）『問題な日本語』、大修館書店
- 小池真理・中川道子・宮崎聡子・平塚真理（2007）『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』、スリーエーネットワーク
- 主婦の友社編（2002）『社会人のための基本マナー—知りたいことがすぐわかる！ 結婚式からビジネスシーンまで、役立つ情報がいっぱい！』、主婦の友社
- スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』、スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』、スリーエーネットワーク
- 拓植美幸・柿添信吾・尾崎公美子（2010）『職場日本語完全実戦攻略』、徳川文化事業有限公司
- 中居順子・近藤扶美・鈴木真理子・小野恵久子・荒巻朋子・森井哲也（2005）『会話に挑戦！ 中級前期からの日本語ロールプレイ』、スリーエーネットワーク
- 永田良太・山木真理子（2012）「地域日本語教室における外国人支援者の役割—鳴門国際交流協会日本語教室の場合」、『鳴門教育大学研究紀要』27、鳴門教育大学、pp.225-231
- 中原宏史郎（2008）「日本における多文化共生の模索：地域日本語教室の展望」、『文化環境研究』2、長崎大学、pp.31-48
- 鳴門市（2012）『とうけい—鳴門市統計年報2012』、鳴門市

- 野元菊雄 (1987) 『敬語を使いこなす』、講談社現代新書
- 野山広 (2013) 「地域日本語教育—その概念の誕生と展開—」、『日本語学』32-3、明治書院、pp.18-31
- 萩野貞樹 (2005) 『ほんとうの敬語』、PHP 新書
- 文化庁文化語国語課 (2011) 『平成 23 年度国内の日本語教育の概要』、文化庁
- ポイクマン聡子・宮谷敦美・小室リー郁子 (2006) 『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編 1』、くろしお出版
- 松田みゆき・山本達之・田口明子 (2011) 「地域日本語教室における、地域文化を語るための教材開発とその活用の可能性」、『2011 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、日本語教育学会、pp.283-284
- 南不二男 (1987) 『敬語』、岩波新書
- 米勢治子 (2006) 「地域日本語教室の現状と相互学習の可能性—愛知県の活動を通して見えてきたこと」、『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究』6、名古屋市立大学、pp.105-119

(いしかわ さり・本学大学院在学)

(うつのみや えり・本学大学院在学)

(こじま ゆか・四国学院大学非常勤講師)

(さいじょう ゆうと・本学大学院在学)

(そう ほう・本学大学院在学)

(たなか だいき・本学教員)